

タイラバ漁法の導入

(水産業改良普及事業 適応化試験)

北薩地域振興局 林務水産課

【背景・目的】

甌島周辺海域においては、キビナゴ漁が盛んに行われているが、水揚げ数量は概ね横ばいを維持しているものの、近年においては燃油や漁業資材の高騰などにより、厳しい漁業経営状況となっている。

そこで、キビナゴ漁等の合間に実施可能な簡易な漁具を用いた漁法(タイラバによる一本釣り)の導入及び普及を図った。

【普及の内容・特徴】

書籍等を参考に漁具を揃え、キビナゴ漁業者3名に配布し、漁法について説明したうえで、試験操業を依頼した。

試験操業の期間は、平成24年6月から翌年2月で、釣果については聞き取りにより行った。

漁具仕様及び漁法については別表のとおりまとめた。

【成果・活用】

試験操業による釣果は、主にオオモンハタ(0.6~2.4kg, 2.0kg前後が主体)で、次にアラカブ, マダイ, アカハタ, キジハタ, プリ, ネイゴ, オニオコゼ, ヒラメ, エソ(釣果の多かった順)で、この漁法が現地での適応性が高いことが確認された。

釣果のあった水深は5~50mの範囲で、特に水深20m前後の瀬では、大型オオモンハタが釣れる傾向にあった。

水温は概ね19 以上で釣果があり、特に25 以上であれば大きな釣果が期待できる。(逆に水温18 以下はほとんど釣れない)

なお、当漁業は、一本釣り漁業のように餌をかける手間やその経費が不要であることやオオモンハタ等の活魚出荷も可能となることなどから、漁業収益の向上が見込まれ、地域に広まる可能性を秘めている。

【その他】

市販されているタイラバに標準でついている針は小型であることから、プリなどの青物がかかると伸びる場合がある。対策として、ヒラマサ針などに交換するとよいが、ヘッドとの重量バランスが悪くなると絡みの原因になりやすいうえ、食いが落ちるので注意する。

1. タイラバについて

タイラバ（鯛ラバ）とは、マダイなどを釣るためのラバージグのことで、元々は漁具である「鯛カブラ」の鉛玉に、スカートのようなヒラヒラを付けるなど釣り用に改良したものである。

これを海中で巻き上げると、ラバー等で作られたスカートが揺れて魚にアピールする。メーカーによって若干の形状の違いはあるが、見た目「小さなタコ」に似ている。

2. 漁具仕様

ラインは、PE1.5から3号程度で、その先に5～10号のナイロンリーダーを結ぶ。

タイラバの重さは、潮流や水深等により異なり、おおよそ60g～120g使用する。

また、ヘッド（おもりの部分）の材質により、その大きさが様々で、タングステンを使っているものは比重が高いため、同じグラム数のタイラバでも、ヘッドが小さくなる。

なお、活性が低く食いが悪いときは、ヘッドが小さいほうが魚信が多い傾向にある。

（参考：甌島では概ねPEライン3号で、その先にシーガーエースの10号を結び、ヘッドの重さは、100g前後を使用している）

3. 漁法

「仕掛けを落として底を取り、ただ巻くだけ」と、それを繰り返すだけの釣り方が、女性や子供にも手軽に出来るため、遊漁者に人気の秘密でもある。

基本は、垂直にタイラバを落とし、底が取れたらゆっくりと中層まで巻き上げ、そこで食わなければまたそのまま底に落とす。たいてい魚は、落下中に見ているので、底についたらすぐに巻き上げるのが鉄則。

また、この釣り方で食いが悪い時は、斜めにキャストするが、根掛かりの危険性は高くなる。

